

【優秀賞】（私立会津若松ザベリオ学園高等学校第2学年 佐藤里咲）

「勝者の責任」

負けることには悔しさが残る。勝つことには何が残るのだろうか。喜びであろうか、それとも嬉しさだろうか。いや違う、勝者には責任が残るのだ。

私がなぎなたを始めて十一年、たくさんの県外の大会や遠征に参加してきた。なぎなたの競技人口は少なく、そこに参加するたびに新しい友人をつくることができた。その中に、小学校のときから全国大会で交流をしてきた友人がいる。地元にはなぎなたを習っている同学年の友人がいなかったこともあり、彼女の存在は私にとってとても大きく心強い。遠く離れている友人であっても同じような考え方や悩みを持っていて、私だけではなかったと安心することもできた。なぎなたからプライベートな話題まで共有し合える友人に出会えたことが喜びだった。時には、東北大会や全国大会で対戦することもあった。どのような試合でも必ず勝敗がつく。友人との試合は「次も絶対に対戦したい」と心が燃えるが、その一方では「次はどちらが勝つのだろう」と先の事を考えると心苦しくなってしまう。

ある大会で以前戦ったことのある友人と対戦することになった。私は久しぶりに彼女に会えることや再び試合ができることを楽しみにしている気持ちと、できることなら対戦することを避けたいという正反対の気持ちに支配されていた。その二つで揺れ、なかなか心が晴れなかった。その葛藤から苛立ちも増えていった。

「戦えること、楽しみにしてたからね。絶対に勝つから。」

彼女も私と戦うことを心待ちにしていた。試合結果は私の勝利であった。彼女は次の大会に駒を進めることができなかった。私は自分の競技を終えて、会場のギャラリーで他の選手を応援していた。その時反対側のギャラリーに座っている彼女を見つけた。彼女は無表情でどこか遠くを見つめていた。声をかけることができない程の状況だった。しかし声をかけないままならこれから会うたびによそよそしくなり、お互い気を遣ってしまうのではないか。だからといって今まで通りだったら、勝ったからって生意気だと思われてしまうかもしれない。どのように顔を合わせていいかわからなかった。私は過去に大切な試合で敗退してしまった事がある。インターハイに出場できないと決まったあの瞬間、私の中にある何かが崩れ落ちていった。今ある空間をも全て拒絶するような失望を感じた。彼女は今、あの時の私と同じ状況なのだろう。あの時、私の仲間が声を掛けてくれたけれど言葉が耳に入ってこなかった。だからなおさらどうする事がお互いにとって良い方法なのか思いつかなかった。

「また里咲に負けちゃった。」

大会の全日程が終了し、帰り際にそう話しかけられた。一瞬にして頭が真っ白になり、周りの人の声や音が一切聞こえなくなった。彼女の一言だけが私の脳裏を駆け巡った。彼女はすぐ無理に笑って

「また次、会おうね。」

と言い帰ってしまった。彼女の後ろ姿を見て、何か言葉をかけられなかったのだろうかとても後悔した。

この試合がきっかけで友人と私の心の距離が遠く離れていきそうでとても怖かった。友人なのか、それともライバルなのか、区別なんてできない。切り離してはいけないからこそ、なあなあな気持ちで試合をしてはいけない。お互いの技術や精神を認め合って共に切磋琢磨していきたいのに、私はこれから何をしていけばいいのかわからなかった。

私はふと高校一年生の時に出場した全国大会の事を思い出した。私は個人試合で三回戦で敗退した。その後に団体戦を控えていたが、負けたショックで気持ちが上向かない。団体戦のアップ前、会場では決勝戦を行っていた。よく見てみると三回戦で対戦した選手だった。彼女の試合は息を呑むほど迫力のあるものだった。彼女は優勝した。その瞬間私も彼女のような試合ができる競技者になりたいと強く思い、自然と気持ちが前向きになった。

やっと気が付いた。心の中のわだかまりがずっと消えていった。勝者はその後の試合で「こんな人に負けたのか」と対戦した相手に後悔させる試合をしてはいけない。正々堂々と試合に全力で臨むことが相手への敬意に繋がっていく。私のすべきことはこれだ。それが勝者としての責任なのだ。私の競技者としての姿勢が変わった瞬間だった。